

小倉城 いま昔



再建された現在の小倉城天守閣

北九州市のシンボルの存在、小倉城。今年、天守閣が再建されて60周年を迎えた。これを機に市民、多くの観光客により親しまれる城にしようとい、内部を改装中。また天守閣周辺の発掘調査も行い新たな成果を得た。改めて多くの物語も秘めたこの城の歴史、魅力の一端を探る。

小倉城の存在が記録に現れたのは天正6年（1578）の宗像大社辺津宮の棟札。北九州市立自然史・歴史博物館の中西義昌学芸員によると、中国の毛利勢が大友一族から離反した立花勢を支援する軍を送る中継基地として永禄12年（1569）、小倉津に平城を構えたことを記していた。場所は現在の小倉城本丸付近で、居館だったとみられる。以後、城には毛利氏の庇護を受けた高橋鑑種・元種親子、豊臣秀吉の時代には毛利勝信が入城。勝信が関ヶ原の戦いで西軍に付いて敗れ改易された後は、慶長5年（1600）に丹後・

宮津から豊前・中津に入っていた細川忠興が本拠地を小倉に移し、同7年、大規模な城普請を始めた。天守閣の完成は8年後で、これが再建前天守閣の原形である。

大阪城を越える規模 奇観の城

当時の天守閣の姿は、天保8年（1837）に失火で焼失したため見ることは出来ないが、諸々の記録では、四角い箱を四つ積み重ねたような外観四重、内部五階、高さ約22・7メートルの塔型天守。1階は秀吉築城の大坂城天守より広く、4階までは白漆喰、5階だけ黒板張り。しかも5階は4階より幅広く張り出した特異な造りで「唐造り」と称されている。元禄時代の1691年、小倉を通ったドイツ人医師ケンペルは「江戸参府紀行」で天守を6層の望楼と見間違えながら「松林の中に高くそびゆ」と感銘深く記している。



原小倉城を描いた小倉城天守復元立面図 (三浦正幸・前広島大学大学院教授提供)

この天守閣についてはまた、美作国津山藩（岡山県津山市）が大工を小倉に派遣、海上から天守閣を見て密かに木図を作ったという話がある。細川忠興はそれを聞いて天守閣の図面を渡し「やった、という。スパイもどきの話だが、もともと、当時の津山藩主森忠政は森蘭丸の弟、忠興も織田信長の縁者。忠政、忠興とも信長の長男信忠から「忠」の字を頂いた親密な仲。海上話は作りごとで、両藩合意の上のことだったのではないかと、中西さんは見る。津山城の天守閣完成時には忠興が忠政に釣鐘を贈っている。津山城も今は城址だけだが、天守閣はもちろん小倉

城と同じく層塔型だった。

天保8年の小倉城天守閣の炎上は、本丸御殿内の塩切場という所からの出火によるもので本丸内の建物は残らず焼失した。2年後、天守閣を除いて他の建物は復興したが、領内の豪商9人から1万3千両を250年賦で借り、領民からも2万5千両を献金という形で吸い上げての再建だった。だが財政に四苦八苦し領民に苦を強いて再建した



小倉城を手本に築かれた津山城の城址。現在、国史跡（岡山県津山市）

城も、そのわずか27年後の慶応2年（1866）8月1日、長州軍との決戦に際し藩自ら焼き、香春に撤退。1602年の築城から藩城264年の役割を閉じた。

原形とは異なるも 心を打つ城

現在の小倉城天守閣は市民を中心に再建を望む声の高まりを受け、昭和34年（1959）に完成した。鉄筋コンクリート製で四重五階建て高さ約23メートル。九州初の再建天守だった。元の天守閣と異なるのは二重目に大きな三角形破風、三重目に千鳥破風を設けていること。設計を担当した藤岡通夫日本工業大学長（当時）は作家劉寒吉氏（当時、福岡県文化財保護審議会委員）

との対談で、原天守閣に破風がなかったことは承知していたものの、現在は破風がなければ天守らしくなく観光客に訴える力がない、との強い声に押された」と説明している。

平成30年2・3月、北九州市立埋蔵文化財調査室が天守台周りの堀の水を抜き発掘調査、築城当時の石垣の築き方を確認、また天保の天守閣炎上時の瓦、木材などを発掘した。佐藤浩司室長は「現在の姿に違和感はあるものの、城には人の心を打つものがある。そこに住む人にとって何者にも代え難いランドマークであり拠点だ。今回の発掘で築城の名手の手腕も確認できた。これらを大切に後世に伝えていきたい」と話している。

シニアスタッフ 村田和夫

◆小倉城講演会レポート◆

小倉城の歴史的意義や造られた当時の社会について理解を深めることを目的に2018年11月25日、北九州市主催で「平成の新発見！小倉城 石垣調査の成果と城の暮らし」の題で講演会が開かれ、佐藤浩司埋蔵文化財調査室長、永尾正剛北九州市文化財保護審議会会長、千田嘉博奈良大学教授が近年の研究成果を披露した。

佐藤室長は天守台周囲の発掘調査で細川、小笠原家家紋のある瓦破片、陶磁器など多種多様な約6000点もの遺物が出土、水抜きした堀からは約400年前の築城当時の巨大石垣が確認でき今後、築造技術などの究明を進めたいと述べた。永尾会長は、細川忠興は豊前への配置換えについて「遠国なれども上方への便は良い」と受け入れ、小笠原忠真は徳川將軍から変事ある時はすぐに伝える「九州御目付」役を命じられていた、などと話し満席の人の関心を引いた。